

2 歩道周辺の地質

東野 外志男

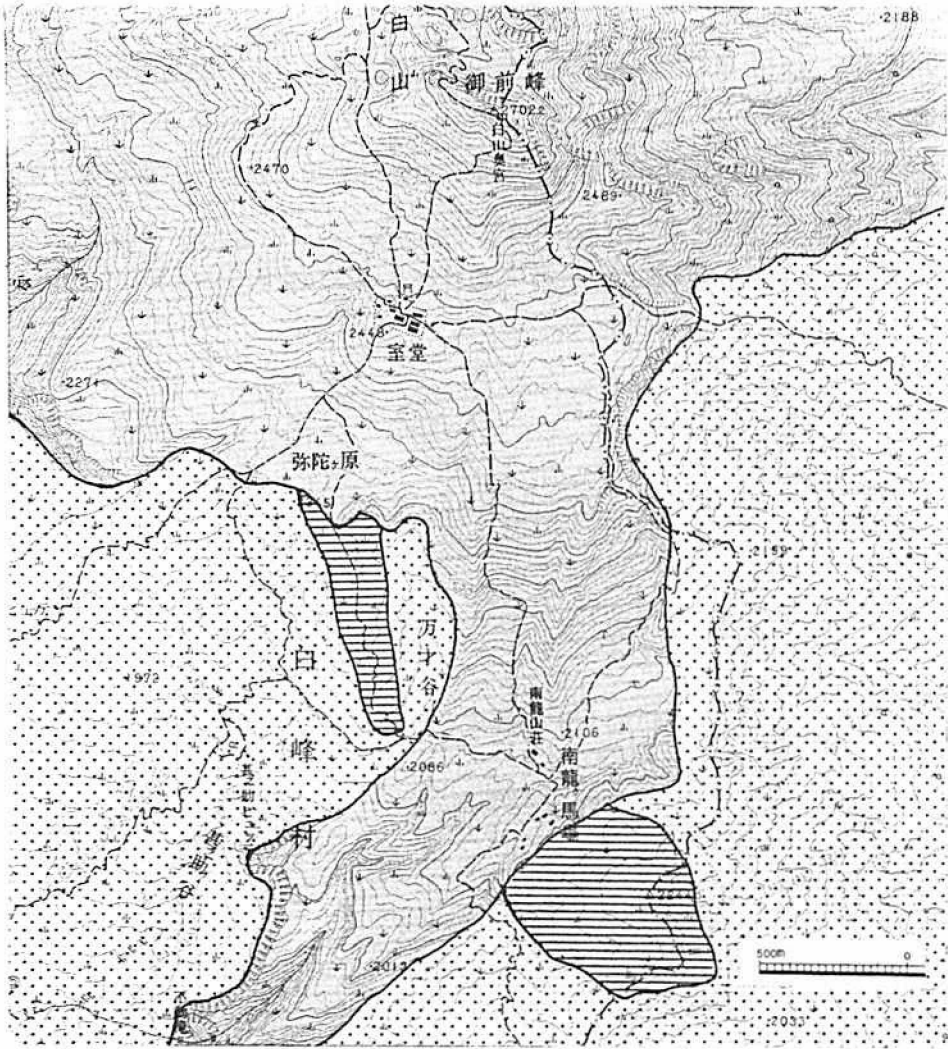
調査地及びその周辺地域には、中生代ジュラ紀後期～白亜紀前期の手取層群、白亜紀後期の濃飛流紋岩類、第四紀の白山火山噴出物が分布する（図22）。白山火山噴出物は、山頂部から南へ弥陀ヶ原、南竜ヶ馬場にかけて幅広く分布し、手取層群と濃飛流紋岩類はそれらの基盤をなす。エコーラインと展望歩道の登山道沿いで岩石の露出状況は、よくない。手取層群はエコーラインの上り口と展望歩道の展望台付近にわずかに露出がみられるのみである。エコーラインでは礫岩が、展望歩道では砂岩がみられ、これらは手取層群の赤岩層に属すると考えられている（石川県教育委員会、1978）。濃飛流紋岩はエコーラインの中・上部に分布する。白色～灰白色の角礫凝灰岩からなり、軽石片が認められることもある。ほかに、緑色の安山岩質岩脈が、展望歩道沿いの手取層群に貫入している。

白山火山噴出物は、溶岩流と火砕流堆積物からなる。溶岩流は室堂平から、トンビ岩コースと展望歩道にほぼ囲まれた緩斜面をへて南竜ヶ馬場の平坦地にいたっている。その先はほぼ南西方向に流下し、先端部は柳谷によって切られ急崖をなす。火砕流堆積物は弥陀ヶ原の平坦地を形成し、クロボコ岩を代表とする大小の火山弾は火砕流堆積物の構成物である。展望歩道で南竜ヶ馬場に近いところでは、大小の安山岩の岩塊が多くみられ、大きいもので2、3 mに達する。

山本ほか(1983)や今井(1984)は、白山地域の標高約2,000m以上の高地に、周氷河地形の階状土が存在することを報告している。階状土は寒冷な気候のもとで凍結・融解作用によって形成されたもので、凹地で雪溪が夏近くまで残されているところに多くみられる。調査地域にも階状土と思われる階段状の地形がいくつかみられる（図23、写真66）。エコーライン沿いにみられる階状土のなかで、最も低い標高は約2,230mである。エコーライン沿いでは、全般的にいて標高の低いものほど、階段状の発達はよくない。今井(1984)は水屋尻雪溪の階状土とそれらを構成する火山灰層との関係から、階状土は氷期ではなく、今から数百年～数千年前以降、つまり、現在とほぼ同じ気候の条件下のもとで形成したと推定している。

文 献

- 今井典子(1984) 白山山頂の階状土. 石川県白山自然保護センター研究報告, 第10集, p. 11-13.
- 山本憲志郎・今井典子・小川弘司・守屋以智雄・東野外志男(1983) 白山の現生階状土. 日本地理学会予稿集, p. 58-59.
- 石川県教育委員会(1978) 手取川流域の手取統珪化木産地調査報告書. 301p.

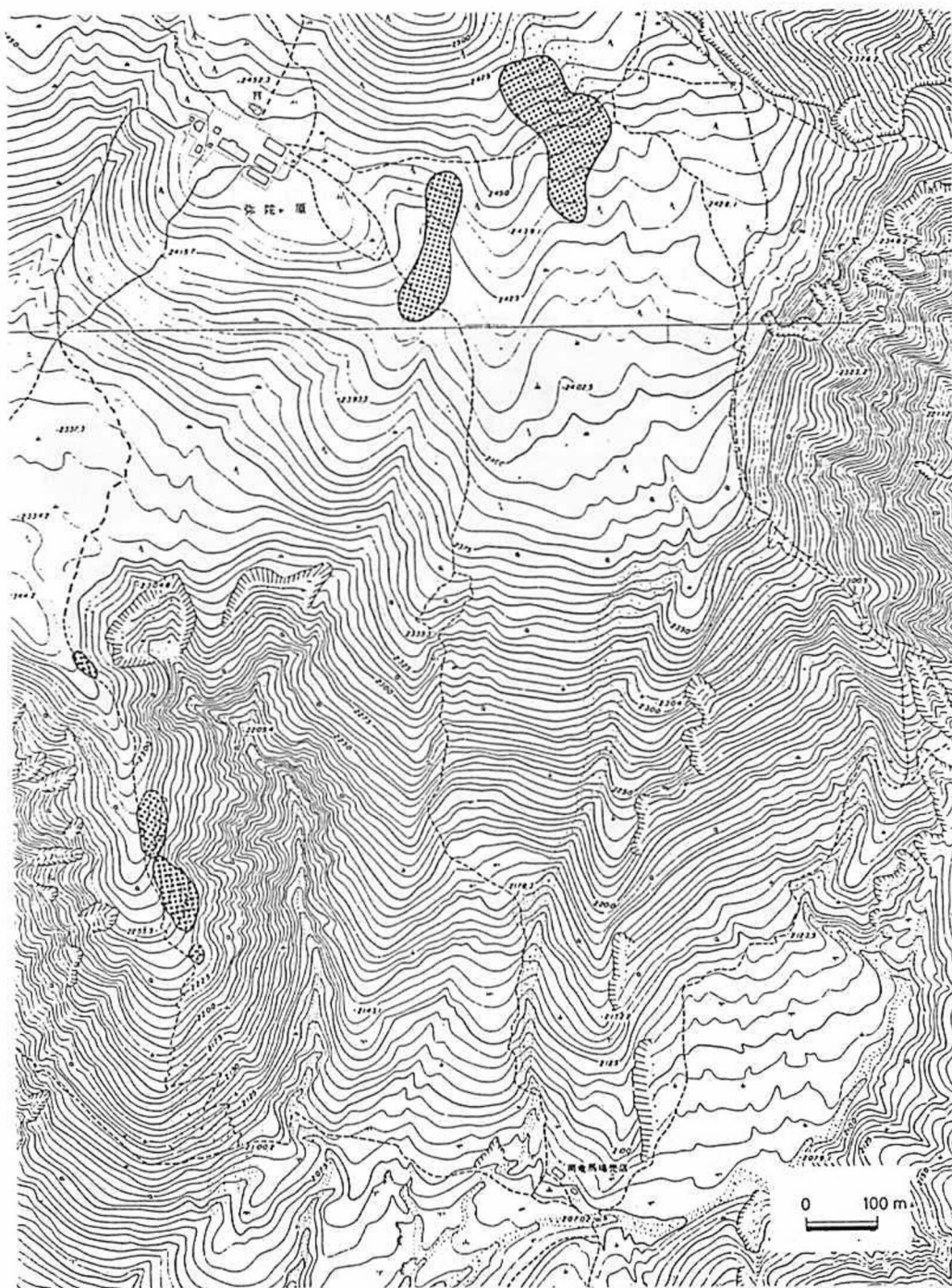


白山火山噴出物
 濃飛流紋岩類
 手取層群

図 2 2

エコライン・展望歩道及び周辺地域の地質図（紺野ほか(1970)を改変）。地形図は国土地理院発行2万5千分の1「白山」（昭和55年発行）を使用。

図 23 エコーライン・とんび岩コース・展望歩道周辺の階状土の分布



エコーライン沿いの階状土

写真 66

